

「生の拡充／生のサンジカ」 プロジェクト・2019

ニュースレター

2019. 4

生・労働・運動ネット富山

富山市神通町 3-5-3

TEL 076-441-7843

FAX 076-444-6093

E-mail:jammers@net-jammers.net

「生の拡充／生のサンジカ」プロジェクト・2019

2019年1月12日

第1回 TALK & DISCUSSION 入江公康さん

「都市に穴をあけ、われ・らは…

——都市を超えるようとする〈サンディカ〉の現在」

昨年2018年の春から秋にかけて、私・たち「生・労働・運動ネット富山」が企画した『米騒動』100年プロジェクトでは、『米騒動』後の民衆運動の歩みの中の、民衆同士の水平的・解放的な〈生〉の〈結び=合い〉・〈組み=合い〉（私・たちはそれを〈生のサンジカ〉と呼んでいる）の希求・創出の軌跡を改めてたどりなおすことを試みた。そうした論議に立ちながら、さらにその〈先〉へと歩を進めることに向けて、今年2019年から、富山の私・たちは、「『生の拡充／生のサンジカ』プロジェクト・2019」を営んでいる。

1月12日（土）、「プロジェクト」の第1回として、県内外からの20数名の参加者とともに、戦後日本の対抗的な労働運動・労働者文化を研究テーマとしながら、海外での反グローバリゼーション運動の紹介を積極的に行っている入江公康さんを迎えて、表記のような集いを行った。

はじめに、当日の進行が、昨年の「100年プロジェクト」の論議を大きく振り返りながら、今年度の「プロジェクト」のモチーフやねらいを語った。

それに引き続き、入江さんは、「黄色いベスト運動」等の海外での街頭闘争や反開発闘争、「スクウォット運動」等の画像を多数紹介しながら、私・たちの「生」

を「負債化」し、囲い込むネオリベ・グローバル資本主義にいかに対抗するかを考えるためのヒントや手がかりとなるような、大きな視点から話をしてくれた。その後の「フリートーク」では、国家・資本が支配すると同時に「他者」に開かれた場であるという都市の両義性を新たな関係性や対抗的な文化の創造へ転じていきたいといった発言等、参加者と入江さん、参加者同士で活発な論議が行われた。

以下、当日の入江さんのトークを中心に報告する。

はじめに

今日の入江公康さんのトークに入る前に、「『生の拡充／生のサンジカ』プロジェクト・2019」のモチーフやねらいについて、少しお話ししたいと思います。

この富山を「震源地」として、日本史上最大の民衆騒動の『米騒動』が全国各地で激しく闘われてからちょうど100年目の昨年2018年の4月から10月にかけて、富山の私・たちは、「『米騒動』100年プロジェクト」を企画し、月に1回のペースで計7回の「シーン」を行いました。それらの「シーン」を通じて、私・たちは、『米騒動』後の100年の民衆運動の歩みの中の、自らが求める「じゃなかしゃば」（今のような世界）に相応しい民衆同士の水平的・解放的な〈生〉の〈結び=合い〉・〈組み=合い〉の希求・創出の軌跡をたどり直しました。私・たちは、そうした支配秩序に対抗的な〈生〉の〈結び=合い〉・〈組み=合い〉を〈生のサンジカ〉と呼んでいます。

そこで論議を通じて、〈生のサンジカ〉の今日的な姿形として、とりわけ、この列島社会の中で大きな「生の困難」を強いられる高齢者やその家族、ケアワーカーが声を上げ、互いに支え合うための「当事者トライアングル」や〈高齢者生存組合〉へと踏み出すことで、『米騒動』後の100年の民衆運動の歩みを私・たち自身が引き継ぐ、という大きな方向性やベクトルを確かめることができたように感じています。そのように、「100年プロジェクト」を終えて、私・たちは、現在、「生の再生産」の領域が支配権力との新たな攻防の場として迫りあがりつつあることを改めて確信しています。

ただ、今さら言うまでもなく、そうした大きな方向性を確かめ合ったことから、ただちにそこへ向かうというわけにはなかなかいきません。まず、何よりも、この国の中に充満している、人間が「生の困難」の中で当事者として立ち上がり、声を上げることを妨げる有形無形の力をいかに打破するかということがあるでしょう。そうした意味で、今後多くの論議やアクションを積み重ねながら、そのための通路や道筋を探り出すことが強く求められているように思います。

私・たちは、そのような思いから、「100年プロジェクト」を営んできたことのその〈先〉と

して、今年2019年から、「『生の拡充／生のサンジカ』プロジェクト・2019」を進めたいと考えています。「『生の拡充／生のサンジカ』プロジェクト」では、この社会で「生の困難」を強いられる私・たちが、〈すべての生の無条件の肯定〉の理念に基づく社会のあり方や、支配権力による〈生〉の囮い込みを打破して共に〈生のサンジカ〉を生み出すことへの手がかりを探り合うことを試みる予定です。

1918年の『米騒動』は、店頭での米価の集団的な「自主値引き交渉」や米の搬出阻止、悪徳商の店舗の焼き討ち、街頭での警官隊との激突、炭鉱地帯でのストライキといった様々な形を取って全国各地に連動して展開されました。『米騒動』に加わった民衆の「叫び」の中に響いていたのは、〈全ての生の無条件の肯定〉ということだったように思います。それは、ひとつの対抗的な理念であると同時に、私・たちが生きる上で不可欠な〈糧〉が無条件で与えられることを求める直接行動や実践としてもあったはずです。過酷な肉体労働に従事する当時の民衆にとって、米は文字通り「命の糧」でしたが、現在のこの国を生きる私・たちにとって、たとえば、それに当たるのは、無料の住宅や医療・福祉・教育サービス、また、生きるために必要なお金を無条件で支給する「ベーシック・インカム」といったものになるのではないでしょうか。

今回、なぜ入江さんを富山に迎えたかということですが、私・たちが〈高齢者生存組合〉と言う際に、それは、高齢者の「最低必需」から「高度必需」までの充足や、『高齢者のための国連原則』の『独立・参加・ケア・自己実現・尊厳』といった理念の実現を要求するものとしてあります。入江さんが編集に関わった『VOL Lexicon』という思想・運動の「用語集」があります。その中に、「都市への権利」という項目があって、都市のインフラを民衆が占拠・「自主管理」して対抗的な都市空間を創り出すことを、そう言っています。その項目自体は入江さんが書いたものではありませんが、そのように、私・たちが〈高齢者生存組合〉と言っていることを、〈高齢者の都市への権利〉としていかに着地させるかということが、今後の私・たちの考えたいひとつの方向性としてあるように思っています。

それでは、前置きが長くなりましたが、入江公康さんを紹介します。入江さんは、研究分野で言えば、社会学ということになると思いますが、東洋大学、文教大学、立教大学など複数の大学で非常勤講師をしながら、戦後日本の支配権力に対抗的な労働運動・労働者文化や、ネオリベ・グローバル資本主義に対抗する世界の民衆の集団性・共同性のあり方を大きなテーマとしています。昨年の「100年プロジェクト」の論議を進めるに際して、富山の私・たちは、入江さんのお書きになったものから大きな刺激を受けてきました。今回、入江さんを富山にお招きして、このように直接話を聞く場をもつことができることを、とてもうれしく思っています。攻防の場としての「生の再生産」領域というと、どうしても「一国主義」的な発想の枠にとらわれがちですが、今回、入江さんには、ぜひ、「都市の権利を生きる〈サンディカ〉」としての海外での反グローバリゼーション運動の実践も含めて、日頃お考えのことを行ふに語って

いただければと思っています。

今日の集いの進め方ですが、この後、入江さんにお話のメモにそって話してもらった後、休憩をはさんで、参加者と入江さんが自由に語り合う「フリートーク」を行う予定です。それでは、今日は、よろしくお願ひします。

トーク：入江公康さん（社会思想・労働者文化論）

はじめに

今日はお招きいただき、ありがとうございます。入江公康と申します。

先ほどの進行の方の紹介にもありましたように、私は、今、首都圏の複数の大学で非常勤講師をしています。一つの大学で授業を3、4コマほどやらせてもらえるとありがたいのですが、場合によっては、一大学1コマで、一日で3つの大学を廻ることもあり、移動だけでも死にそうです。「渡り鳥講師」というか、電車を使っていますが、そんな日は帰宅が夜11時ぐらいになるので、もう疲れてしまってヘロヘロです。



入江公康さん

非常勤講師としての「生」に直接関わる問題なので、現実的なことをお話ししますが、たとえば、今、非常勤講師が週1コマの授業を月4回担当するときの講師料の月額はいくらぐらいだと思いますか？「首都圏大学非常勤講師組合」で調べたところ、つい最近まで、大体どの大学でも、週1コマの月4回で2万7千円です。大きな大学でも、やっと3万円を超えるかどうかですね。授業を週4コマやってもおよそ12万円、週8コマでやっと24万円ぐらいです。ボーナスも昇給もありませんし、福利厚生もないに等しい。当然、社会保険もありませんので、国民健康保険に加入せざるを得ないのですが、保険料が高いですね。授業を週8コマもやると本当に疲れ切ってしまって、なんとか生きているという感じです。

先ほどの紹介で、私が「首都圏大学非常勤講師組合」の活動にも関わっているという話がありました。そのことについて触れておくと、民主党政権時代に「労働契約法」が改正され、5年経つと有期契約から無期契約に転換しなければならないということになりました。それ自体はいいことですが、無期契約にしたくない大学はその法律を逆手にとって、雇用期間が5年になる前に一度雇用を打ち切って、有期契約のままにしようとする動きが出てきたわけです。最初に大規模にそれをしようとしたのが早稲田大学で、次は東大です。こうした動きに対して非常勤講師組合では、全力をあげて抵抗してきました。

非常勤講師組合で『経済的徴兵制をぶっ潰せ』という冊子を岩波ブックレットから出しました。それは組合が主催した同じタイトルのシンポジウムで、何人かの人たちが話したことをまとめたものです。「『米騒動』100年プロジェクト」で昨年4月に富山に来て話をした栗原康さんも、登壇者としてそこで発言しています。シンポジウムは、非常勤講師の雇い止めを許さないということ以上に、現政権がなんのてらいもなく、「奨学金という借金をチャラにしてやるから、その代わりに自衛隊に入れ」と言いだすような状況に対して、自分たちの目の前にいる学生たちを戦場に行かせないという趣旨で開催したわけです。

現在、大野英士さんが非常勤講師組合・早稲田大学ユニオンの代表、つまり分会長をしています。2005年に彼と白石嘉治さんが中心になって、『ネオリベ現代生活批判序説』という本を出して、現在、その「増補・改訂版」も出ています。その本では、「労働／消費 入江公康氏に聞く」という章で、私のインタビューが掲載されています。昨年の「『米騒動』100年プロジェクト」に愛知から参加していた矢部史郎さんも、「運動／政治 矢部史郎氏に聞く」という章の中でインタビューを受けています。

この間、ネオリベが大学内でも猛威をふるっていますが、それに対する批判が『序説』の主要なテーマです。結局、連中にとってムダだと思うものを切り捨てて、大学の建物を高くすることばかりしています。最初の波は、国立大学の「独立法人化」だったと思いますが、その内に国立大学でも財界の経営者や金融業界が大学経営の中に入ってきたりして、「改革」と称して好き勝手なことをやっています。大学の授業も、資格を取るための講座や実務、実技なんていうのがやたらと多くなりました。

とりわけ、第二次安倍政権になってからは、人文系の分野や社会科学は「実利」を生まないし、そうした体制に批判的な視点に立つような学問は無用だということで、全部ひっくりめて縮小・解体していくこうとする圧力がとても強くなっています。また、大学で学ぶ外国語を英語だけにしようということで、その結果、第二外国語の中国語や、フランス語、ドイツ語の授業ですら目いっぱい削減されています。多くの大学で非常勤講師がそうした言語を教えているのですが、その人たちが首を切られそうになって私たちの組合に駆けこんてきて、その対応に奔走しています。

こうしたひどい状況ですが、早稲田大学では私たちの組合が「完全勝利」して、非常勤講師の雇止めを撤回させました。昨年、日本一のマンモス大学の日大でも、非常勤講師の「ゼロ化計画」というのが発覚しましたが、それとほぼ同じ時期に、日大アメフト部の監督が選手にルール違反のタックルを命じて相手側の選手を負傷させて、大きな事件になりました。ああいう大学ですから、学生の将来どころか、金儲けに必死という感じですが、本当に現在の大学はただの企業体のようになっていて、学問研究が極めて困難な状況にあります。

さすがに組合活動ばかりやっていると疲れるので、「もっと研究や勉強のための時間をくれよ！」と訴えたくもなります。結局、じっくりと本を読む時間を取りきず、移動中の

電車の中や講師控え室で勉強するという状態ですね。さすがに私も50歳になりましたので、こんな状態で集中してものを考えようとしても、すぐに疲れて眠くなります。自分の「生」を維持するのにこれからどうしたらしいのか、「高齢者生存組合」を構想している富山の皆さんと、ぜひ一緒に考えたいと思います。

ネオリベの「全球化」に抗する反グローバリズム運動

先ほど、社会学者ということで私の紹介がありましたが、現在の日本で社会学は学問としてまともに成立していないんじゃないでしょうか。今の社会学者は——社会学者だけじゃありませんが——まあ体制的というか、思想的にダメになっていて、若手の古市憲寿という人がいますが、ああいうのに象徴されるように、タレント活動かマーケティングみたいなことばかりですね。じつに退屈でくだらない。ですから、私は社会学者を名乗るのをやめています。

前置きはこれくらいにして、本題に入りたいと思います。現在の状況をどのように捉え、それにいかに対抗するかということについて正しい「答え」を出すというのは、私にはとても無理ですので、むしろ、今日は「問題提起」ということにして、この場の参加者の皆さんと一緒に考えたいと思います。富山に来る前に何を話そうか悩みましたが、まずは、「ネオリベ資本主義」が世界中をいかにメチャクチャにしてきたかということからお話ししたいと思います。

私の理解だと、ネオリベ・グローバル資本主義というのは、多国籍企業のネットワークを「地球大」に拡げることです。その際に、どの国でも共通して政策の「二本の柱」になるのが「規制緩和」と「民営化」ですね。「規制緩和」は" deregulation (ディレギュレーション) " ですから、" regulation (規制) " を" de (脱) " すること、つまり、企業活動にはめてきた枷をはずして「自由」にさせることです。ようするに、「自由化」です。一方、「民営化」は、" privatization (プライバタイゼーション) " の訳語です。この訳語はいかにもズるいですね。たぶん考えていたのは官僚でしょうが、そのまま訳せば、「私化」で、さらに言うのなら「私物化」でしょう。一言で言えば、国営・公営事業体や公共財を資本が自分たちの「独占物」とすることです。そのように、「二本の柱」のどちらも、市場において貨幣との交換が万能であるような世界をめざすことにほかなりません。つい最近も、「周回遅れ」だと言われているのに、水道事業を民営化するための法律が日本で成立しました。世界のどの国でも、明らかに失敗したと言われているにもかかわらずですよ。

こうしたネオリベ・グローバル資本主義の猛威に対抗して、アメリカとメキシコの間の貿易関税を廃止する北米自由貿易協定（NAFTA）の発効日の1994年1月1日に、メキシコ・チアパス州でメキシコの先住民を軸とする「サパティスタ民族解放軍」が蜂起し、その後も解放区での自律・自治を維持し続けています。最近もチアパス州で鉄道の建設計画に反対する集会が開かれていますが、サパティスタたちの闘いは、ネオリベ・グローバル資本主義に対する民衆蜂

起や抵抗運動として、現在も強固に継続されています。

1997年のアジア通貨危機では、ヘッジファンドなどグローバル資本がアジア各国の通貨に「マネーレース」をかけて莫大な利益を上げたツケを、タイやマレーシア、韓国、インドネシアなどのアジア諸国が自国通貨の為替レートの大幅な下落という形で払わされました。そのように好き放題にふるまうグローバル資本主義に対する怒りや抵抗の動きの拡大を背景に、1999年シアトルのWTO（国際自由貿易機関）の総会には、「反ネオリベ」を掲げる様々な運動グループや活動家たちが結集して総会を中止に追い込んだことは、皆さんもよくご存じだと思います。また、99年には、フランス南部の小都市のミヨーで、建設中のマクドナルドの店舗が農民運動家のジョゼ・ボヴェらによって解体される、ということもありました。

そのように、90年代後半から2000年代初頭にかけて、新自由主義の「全球化」、つまり、グローバリゼーションに対する反対運動が、世界的に大きく盛り上りました。こうした動きが、2001年9月11日のアメリカでの「同時多発テロ事件」の発生により、やや停滞した時期もありましたが、それでも世界の各地での経済の「自由化」のための国際会議やサミットなどの開催を妨害したり、中止に追いやってきました。しかし、日本の運動は、こうした世界的な運動のサイクルから脱落していたように思います。もちろん、そんな時代でも日本で頑張っていた人たちはいたと思いますが、圧倒的に少数だったし、世界各地の闘う人たちの間では、ネオリベとは何かについて共通の認識ができていたのに、日本の運動状況はそこまで達していなかったように思います。

「世界内戦」下の「非対称戦争」

そのような「全球化」が進行する際に、経済問題のみならず軍事問題がとても大きいのではないかと思います。多国籍企業のネットワークが地球全体に及ぶようになることで、グローバルな「帝国」が形成され、事実上、国境や国民国家の存在理由が無効化されてきました。その際に、グローバル資本の利潤追求が円滑に行われるよう、米国を始めとする多国籍軍が多国籍企業のネットワークを軍事的に防衛するという構図になっていました。しかし、当然、そのネットワークから漏れ落ちる人たちがたくさんいるわけです。また、周縁化されたり、経済的な格差の中で底辺層に追いやられたりする人たちが、こうしたネットワークや「帝国」に対して叛乱を起こすという状況の中で、警察と軍隊が融合して一体化し、戦闘行為と治安維持活動が混ざりあうようになってきています。

国民国家間の戦争では一国の正規軍同士が戦うことになるわけですが、「帝国」一国になれば戦う相手がいなくなるので、帝国「内部」にしか敵がない「内戦」状態になります。本来、内部の敵を制圧して治安を維持する組織が警察ですが、経済活動のグローバル化の進行の下で、軍隊と警察が融合したかのような「対テロ部隊」が、グローバル資本のネットワークを攪乱す

るような集団を容赦なく弾圧・制圧するようになりました。

富山ではどうか分かりませんが、オリンピックが間近ということもあるのでしょうか、東京ではいたるところで「対テロ警戒中」です。考えてみれば、東京では、オリンピック以前からもう長いこと、街角の電光掲示板や駅の柱などに「対テロ警戒中」というサインがあちこちで出ています。以前、埼玉のはずれの方にタクシーで行ったときに道路に車止めがあったのですが、それに「国土交通省 対テロ警戒中」と書いてあって、「こんなところでテロを起こしてどうするの？」と、失笑せざるをえませんでした。結局、日本では、01年の「9・11」というより、その前の95年の「地下鉄オウムサリン事件」の頃から、ずっとそんなモードじゃないですか。

つい先ごろ、反天皇制関連の集会に行ったのですが、そのときのデモでは、最新の乱闘服姿の「完全武装」した機動隊が、デモ隊の数以上に多くいました。「天皇制反対」を掲げるデモは、毎回そんな感じなんですが、「お前ら、何やってんだ～」みたいな感じで、右翼が拡声器でがなりたてながらデモ隊に襲いかかろうとするのです。じつに平和的なデモなのに、「非対称」過ぎますね（笑）。

「世界内戦状況」というのは、こういうのも含めて「非対称戦争」と言ってもいいんじゃないでしょうか。つまり、先ほども言ったように、今のグローバルな多国籍軍は、相手国の正規軍と戦うのではなくて、帝国内部の犯罪組織や、宗教を背景にした武装集団、あるいは、貧民や多国籍企業のネットワークの「搅乱分子」といった、要するに、国家をバックとする正規の軍事組織やそれに準ずるような武装組織ではないものと戦うわけです。そのように、グローバルな多国籍軍や「対テロ部隊」が、治安対策と戦闘行為が渾然一体化した状態のまま、軍事組織の性格や攻撃力から言ってもまったく「非対称」な存在と闘うという構図が、1990年代の後半から2000年代にかけて全世界に広がっていきました。

アナキズムへの再評価と「ブラックブロック」の登場

そんな状況の中で、「G8（G7）サミット」やグローバル資本のための国際会議を妨害・打倒することを目指す様々な運動が展開されてきました。こうした運動の特徴を見ると、今までの新旧左翼運動のやり方を真似しないと言うか、党派的でないような形で「自己組織化」する、あるいは「超組織化」するという試みがたくさん出てきたんですね。ヒエラルキー的なピラミッド状の組織をつくらないような集団性、あるいは、「前衛党が『無知』な大衆を指導する」という形ではないような運動のあり方が模索されてきたというのが、反グローバリズム運動ではなかったかと思います。言うまでもなく、反グローバリズム運動自体が、「非対称戦争」のターゲットにもなるわけですが。

最近、日本でも栗原さんなどが頑張っているので、アナキズムがかなり評価されているとい

うか、再認知されるようになっていて、別に負けてもいいんですが、それに対してマルクス主義の方はちょっと負けているんじゃないかなという気がします。かつてマルクス主義が運動の外に追いやつてきたものが、今、もう一度「回帰」しているように思います。私なんかはそこにある種の可能性を感じてきたのですが、運動の中にいばったヤツがいないとか、妙な政治を集団の中に持ち込まないということで、ずいぶん風通しも良くなっています。先ほどの進行の方の挨拶の中で、『米騒動』後の民衆運動の「水平的」で「解放的」な方を〈生のサンジカ〉と呼んでいましたが、この間、世界的にこうした「水平的」な運動のあり方が模索されてきたように思います。

こうしたアナキズムに対する再評価の動きと連動して、この間、反グローバリズム運動が大きく盛り上がる中で、「ブラックブロック」と呼ばれる、非常に戦闘的な人たちも登場しています。海外のデモの映像を見ていると、フードの付いた黒のパーカーを着て、マスクやマフラー、バンダナなどで顔を隠して街頭で暴れている人たちがいますが、彼ら／彼女らが「ブラックブロック」です。日本の運動だと、「あんな暴力的なのはよくない」ということですぐに否定されてしまうのですが、とにかく元気がいい。海外のデモでは、スターバックスの店舗のガラスを割ったり、車に火を点けたり、ひっくり返したりしています。せっかくですので、その画像をプロジェクターで映してみます。

これは、ギリシャの「ブラックブロック」ですね。やはり、黒いパーカーを着て、フードをかぶり、デモの先頭に立って暴れるという感じです。海外のデモの画像は他にもあったと思うのですが、最近のヨーロッパのデモでは、発煙筒をがんがん焚いています。「ブラックブロック」と言っても、最近は、黒にこだわらなくなっているようですが。



デモで発煙筒を焚く

この画像では、発煙筒を投げようとしていますね。「ブラックブロック」の画像は、このくらいにしたいと思いますが、まあ、イメージとしてはこんな感じです。こうした「ブラックブロック」というスタイルは、別にギリシャだけじゃなくて、フランスやドイツ、それにアメリカなどにも登場しているし、その他にもいたるところで登場してきています。

今日の私の話のメモで、アメリカで社会運動を研究している人が言っていることを、いくつか抜粋して紹介しました。そこにもあるように、「ブラックブロックとは戦術である。要するにみんな黒い格好をしているから警察が特定できない。ある特定の集団やフォーマルな組織のことを言うのではない。あくまでも戦術だ」ということです。ですから、皆さん、デモをするときに黒いパーカーを着てマ



街頭を占拠・デモするギリシャの「ブラックブロック」

スクをして街頭に出ていっても、「ブラックブロック」になります。

「ブラックブロックの戦術は、ドイツでの1980年代のスクオッター運動の中で生み出された。本質的に匿名性を創出する方法である。」

後でまた、「スクオット運動」のことをお話ししたいのですが、言ってみれば、「不法占拠」です。

「警察の襲撃からスクオットを防衛し、デモ行進や集会に参加する若いアナキストは、みな黒いスカーフマスクと黒皮ジャケットを着込んだ。ブラックブロックというフレーズを発明したのはドイツのメディアか、ないしはドイツ警察らしい。」

「北米のアナキストは、1991年の湾岸戦争に対する抗議行動でブラックブロックを初めて経験した。92年には、サンフランシスコのコロンブスデーへの抗議でもブラックブロックが登場した。アメリカのアナキストは、黒のジャケットをパーカーで代替するが、それは、西海岸のスケートボードパンクに由来するようである。」

「本質的に“暴力”という言葉は、他の生命に害を与える、痛みや苦痛を生じさせることを意味する。しかし、ブラックブロックは生あるものを攻撃しない。」

「ブラックブロック」のメインの行動は、あくまでもグローバル資本主義を象徴するようなモノを破壊することだろうと思います。しかし、最近は、レイシストを殴ったりしています。

「彼らは他のアクティビストよりも、対決戦術を好んで採用する。例えば、腕を組んで警察の阻止線を押し戻す。ゴミ箱や新聞販売機、街路のがらくたからバリケードを構築する。警察の隊列から逮捕者を引き戻し、手錠を切ることによって『非逮捕』を実践する。象徴的行動として、街路灯にスプレーで落書きをする。ドラミングする。旗を燃やす。また、モロトフカクテル（火炎瓶）を投げる。窓ガラスを割る。スプレー。密集陣形。」

「密集陣形」（ファランクス）というのは、ギリシャ・ローマ時代の戦争で、大盾と槍をもつた重装歩兵が一丸となって攻撃する際の陣形です。古代ローマのように、「ブラックブロック」でも、デモ隊が密集して隊列を組んで、警官隊と対峙するわけです。

「ポスト・グローバル化」時代の中の「帝国再分割」

「ブラックブロック」の特徴を皆さんに紹介しましたが、こういう人たちが世界各地で反グローバリズム運動を先導してきたと言ってもいいように思います。しかし、日本の「非暴力的」で穏やかな人たちというのは、「ブラックブロック」みたいな運動を「あいつらは暴力的だ」

ということで排除してしまいがちです。もちろん、軋轢はあるんでしょうが、しかし欧米の運動は、「ブラックブロック」のようなものをどこかやんわりと肯定しているようなところがあるように思います。またあとで「黄色いベスト運動」について言及したいと思いますが、フランスを見ていても、そのことはよくわかりますね。

01年に「9・11」の事件が起きてから、全世界的に「対テロモード」に突入して、中東諸国は政情が非常に不安定な状態になったわけですが、少しそれに関連することに言及したいと思います。2005年にフランスで「郊外暴動」と呼ばれる事態が起きました。その年の10月27日夜に北アフリカ出身の3人のアラブ系移民の少年たちが警察に追われて変電所に逃げ込み、その内の二人が感電死し、一人が重傷を負いました。その出来事をきっかけに、移民が集住するパリの郊外地域で暴動が発生して、1万台以上の車が燃やされました。その少年たちはフランスで生まれているので、移民とはいっても法律上はフランス人なんですが、これもグローバリズムのある種の「余波」だったのではないかでしょうか。

2008年には、「リーマンショック」が起きます。これはマネーゲームに血道を上げるグローバル資本主義の「限界と終焉」を象徴するものでした。そのように、現在、全世界的に「ポスト・グローバル化」の時代に入りつつあって、これまで世界の果てまで席捲してきたグローバル資本主義がひとつの終焉を迎えているのではないか、と私としては思っています。そうした動きの中で、日本は「周回遅れ」の一番手という感じで、現政権に現れているように、極右と新自由主義が一体化したという感じでしょうか。

いずれにしても、現在、世界の政治・経済的な状況が、これまでとは違うモードに転換しつつあるように思います。現在、「帝国」的状態が「再分割」されるというか、そこにヒビや亀裂が生じてきていて、その一つが「トランプ現象」ではないでしょうか。実際、彼はグローバルな「帝国」ではなく、「アメリカファースト」とか言っているわけですからね。欧州でもそれに呼応して、極右や一国主義的保守の台頭が激しくなっています。とりあえず、私は、こんな感じで現在の世界を認識していると思ってもらえばいいかと思います。

「タルナック事件」で弾圧された「不可視委員会」

今日の私の話のメモに、「Insurrectionism（インサレクショニズム）」と書きましたが、「Insurrection（インサレクション）」は、「蜂起」という意味ですので、「Insurrectionism」というのは、「蜂起主義」になります。「革命」というよりも「蜂起」というか、現在、「蜂起主義」者とか「蜂起派」と言われるような人たちが「ブラックブロック」とも重なりながら海外の運動シーンに登場してきているので、そのことについて少し紹介しておきます。

こうした「蜂起主義」・「蜂起派」というものの嚆矢が、実はフランスの人たちなのですが、そういう人たちが若いアナキズム系の運動に大きな影響を与えています。彼ら／彼女らは、「不

可視委員会」と名乗っていますが、私も寄稿したことのある『HAPAX』という思想・運動誌を出している夜光社という小さな出版社が、『われわれの友へ』という「不可視委員会」の本の翻訳を出しています。その本よりも前に、『来たるべき蜂起』という「不可視委員会」の本の翻訳が別の出版社から出ています。

知人に教えてもらって観たんですが、2016年公開のフランスの映画で、『未来よこんにちは』ということがあります。その映画はフランスのリセ（高校）で哲学を教えているある年配の女性教師の話なんですが、彼女は、突然、不倫した夫から別れを切り出されてひとりぼっちになってしまって、母親の介護に振り回されながら、都会と田舎を往復してあちこち歩き回ることになります。その哲学教師の女性の元の教え子が先ほど言った「不可視委員会」のメンバーらしいのですが、彼は、エコール・ノルマル（高等師範学校）という、フランスの超エリート校、要するに大学教授を養成するところに進学したんですが、彼女を慕って会いに来ます。その彼女の元の教え子を含む若者たちは、パリの郊外の古民家を借りて共同生活をしているのですが、その哲学の女性教師もそこに彼と一緒にいろいろと感慨にふけるというような、たわいないというか、いかにもフランス的なシャレた雰囲気の映画なんですね。そう名乗るわけではないのですが、状況からすると、その映画に出てくる彼女の元の教え子は、おそらく「不可視委員会」だと思います。

「不可視委員会」のメンバーたちは、パリから30kmほど離れた郊外にあるタルナックという村の古民家を借りて共同生活をしていたのですが、2008年11月、そのリーダー格のジュリアン・クパという青年と彼の恋人の女性、その他のメンバーの計9名の若者たちが、フランス警察の対テロ特殊部隊に急襲されて、銃口をこめかみに突きつけられて連行されるという「タルナック事件」が起きています。

そんなことをしては危ないんじゃないのかと思ってしまいますが、フランスとドイツの間で、高速鉄道を使って使用済核燃料の輸送をしているそうです。それに対する抗議行動として、高速鉄道の軌道上に障害物を置いて輸送を妨害するということがありました。それが「テロ行為」だということで、フランス警察は、「不可視委員会」のメンバーたちを犯人だと決めつけて、強引に逮捕・連行しました。その際、フランス警察が「証拠」として挙げたのは、彼らが住んでいた民家にあった鉄道の時刻表とはしごでした。そんなものはどこの家にもあるだろうと思いますが、その程度の証拠で、「だから、お前たちがやったんだろう！」ということで逮捕したのですから、笑うに笑えない話です。たとえ、高速鉄道の軌道の上に障害物を置いたとしても、自動停止装置が作動するので、それがただちに列車転覆につながるということにはならないでしょう。

そのように乏しい物的証拠で、警察が「不可視委員会」をテロ行為の犯人に仕立て上げて逮捕したことに対して、まっさきにイタリアから抗議声明を送ったのが、ジョルジオ・アガンベニという世界的に著名なイタリアの哲学者です。彼はその抗議声明の中で、「高速鉄道の軌道

上に障害物を置いたために列車の運行が遅れたとしても、そもそもイタリアでは列車が時刻通りに来ないことが当たり前。そんなことが『テロ』なのか」と、気の利いたことを言っていました。

『われわれの友へ』や『来るべき蜂起』のようなテキストは高度で、なかなか難しいのですが、ただ、そこでは抽象的なことと具体的なことが緻密かつ綿密に練り合わされていて、とても実践的なんですね。一言では言えませんが、それらを読むと、今、こんな状況なのか、そして、それにどう対峙すればいいのかということがよく分かります。今日の私の話のメモにも、そこから書き抜いた言葉をいくつか載せましたので、後で読んでいただければ、と思います。

奨学金という重い「足かせ」

悲惨な世界をもたらすという意味で、「成果」を上げた世界経済の「グローバル化」に対抗する運動の側からの一つの「応答」として出て来たと思うのが、デヴィッド・グレーバーという、アメリカの人類学者でアナリストの理論家が書いた『負債論』という本です。2016年にその本の日本語訳が出ていますが、分厚くて読むのになかなか骨が折れる本です。本人としても、マルクスの『資本論』の向こうを張って書いたものでしょう。先ごろも「NHKスペシャル」の『マネーワールド～資本主義の未来～第3集 借金に潰される』というドキュメンタリー番組で、人間学者グレーバーが、なぜか「負債問題」の専門家として登場していました（笑）。彼がその時に言っていたのは、現在、経済成長よりも負債の累積のテンポの方が早くなっているということでした。世界的にそういう経済のシステムになってしまったということですね。

ところで、「負債問題」というのは、私自身や皆さんもよくご存じの栗原康さんの問題でもあるわけで、私個人の話にもなってしまって申し訳ないのですが、いわゆる「奨学金」問題です。かつては「日本育英会」、現在は「日本学生支援機構」というところで取り扱っているわけですが、日本の「奨学金」制度の問題は、皆さんもよくご承知ですね。

普通は給付制度によって支給されるものが奨学金ですから、「奨学金を借りている」という言い方をするのが相応しいかどうか分かりませんが、現在、学生の半数近くが「奨学金」を借りています。私も500万円以上、「奨学金」の借金を抱えています。それを返さないままにしていたら、支援機構に訴えられて、裁判所から一括払い返済せよ、という通知がきました。けれども、私の実情からいって返済は絶対に無理です。当然、支援機構の側もそのことを分かっているので、ある段階で分割払いの返済計画を示てきて、これで「和解」しろと言うので受け入れざるを得ませんでした。しかし、結局、返済が難しい状態は何も変わっていません。

借金というのは、重い「枷」のようなものですね。そのことが、現在、若い人や学生が動くに動けなくなっている大きな理由だと思います。大学の学費が異様に高くなっているために奨学金を借りざるを得ませんが、大学を出た後で就職できなければ、奨学金を返済できないし、

さらに悪辣なのは、奨学金を利用しようとする際に、連帯保証人まで付けさせられることです。最近は機関保証という制度もありますが、それには1ヶ月5千円を払わなければいけないということです。

先日もネット上で話題になってましたが、大学卒業後の奨学金の月々の返済額が4万円にもなるそうです。今、大学を出たての若者の初任給はせいぜい17、18万円でしょうから、その中から毎月何万円も返すなんていうのは本当に苦しいですし、まして就職できなかったら、返済はまず不可能です。

いずれにせよ、高い学費と「奨学金」という借金が、大学での自由な活動を阻害しています。大学にいるときから学費のためにアルバイトをせねばならず、奨学金の返済のためには就職にも失敗するわけにいかないので、就活に駆けずりまわる中でそのことだけで頭が一杯になっているし、ヘタに目をつけられれば怖いので、社会運動なんかやる余裕などなくなってしまいます。本当に大問題だと思います。

そうした状況の中で、グレーバーの『負債論』が登場して大いに注目されました。残念ながら、日本ではそれほど注目されていませんが、世界的にはベストセラーです。私の知人の話だと、ドイツでは駅のキオスクみたいなところで売っていたそうです。グレーバーは、その本の「あとがき」で自分の教育ローンのことについて、彼自身はなんとか返済したようですが、その本の中で、彼は、借金は必ずしも返さなくてもいいということを言うわけです。

こんなひどい状況ですので、日本で昔あったような、借金帳消しの「徳政令」や、「徳政一揆」のようなものが、今再び起きてもいいんじゃないかとさえ思います。結局、現在の世界も借金で経済をまわしているという状態です。世界各地の貧困国が債務危機に陥ると、IMF（国際通貨基金）や世界銀行が介入して、「公共事業や公共サービスを『民営化』しろ」、「外国企業の参入を『規制緩和』しろ」といった条件を付けて融資をするわけです。その結果、その国がどうなってしまうかお構いなしに、ひたすら返済を強要し、外資がどっと入って、その国の経済を破壊する。そのように、「負債問題」というのは国家レベルでも深刻な問題ですし、個人レベルでもそうです。

グレーバーの『負債論』が優れているのは、彼が人類学者として貨幣そのものの「秘密」の解明にまで迫っていることでしょう。マルクス『資本論』の第1巻の最初の方で、「商品形態論」として貨幣の発生を論じてますが、グレーバーの『負債論』は、マルクスの仕事を引き継いだものかもしれませんのが、私はそれよりも一步抜け出たと思います。ですから、今日の私のメモにも「『貨幣』を自明視しないこと」と書きましたが、『資本論』もそうですが、グレーバーは貨幣の背後にある暴力の問題を手放していません。

彼の『負債論』では、古代ローマ帝国の時代には、軍隊を派遣して征服した遠方の土地にローマ帝国の銅貨を流通させることでその土地を支配した、と述べています。そのように徵税のシステムをつくりだすことで、富をローマに集中させるシステムをつくったのです。その結果、

それまで地域経済の中でお互いに貸し借りをすることでそれなりにうまくやっていたのに、そこにローマ帝国の「借用書」が流通するようになりました。つまり、グレーバーによれば、紙幣というのは借用書を流通させたものだということです。マルクスは、たしか『資本論』のどこかで、貨幣というのは「これだけ渡したんだから、その分、これだけ働け」という、労働の指図書のようなものだと言っていましたが、グレーバーの論議は、それをさらに発展させています。

グレーバー自身は、「いま、ここ」にある、お金や交換を介在させないような「コミニズム」を考えています。それこそ、誰かが落としたものを拾ってあげるのに、普通いちいちお金を要求したりはしませんが、彼は、そういうことが「コミニズム」の基盤だと、『負債論』の最後の方で言っています。そこまで楽観的に言い切っていいのかよく分かりませんが、彼によれば、貨幣を介在させないということや、タダでいろいろなことをするということにこそ、「コミニズム」が宿っているということです。先ほども触れた、この間の全世界的なグローバリゼーションに対抗する実践の中から、このような重要な著作が生まれたと言ってもいいでしょう。

先ほど「帝国再分割」ということを言いましたが、そのように、現在の世界はすでに「ポスト・グローバル化」の段階に入っているように思います。かつてのマルクス主義の図式で言えば、独占企業に結びついた金融資本が大きな力をもつ「金融独占資本」の段階から、今後、経済活動に国家が積極的に介入するような「国家独占資本主義」や「統制経済」に近いような段階に入っていくのではないか、と「予言的」なことを言っておきましょう。その辺のことは、また、後々の課題ということにしたいと思います。

「リベラル対ファシズム」という枠組みの限界

こうした「帝国再分割」の先触れとして、「アメリカファースト」を唱えるアメリカの特朗普の登場ということになるのではないかと思います。結局、特朗普のような人物を支えているのは、非常に保守的な白人「中間層」ですね。後でまたお話ししたいと思いますが、ファシズム研究の知見を踏まえれば、「中間層」というのはファシズムの「温床」です。

それはアメリカだけに限ったことではなく、世界的に見ても、フランスでは「フロン・ナショナル（国民戦線）」という極右勢力が登場してきていますし、ポーランドの現政府は右翼ファシスト政権です。また、昨年10月末の大統領選挙で、労働党政権の候補者を破って当選したブラジルのボルソナーロ大統領は、元軍人の極右です。言うまでもなく、この日本ではずっと極右政権が続いているが、この間の日本の韓国に対する対応では、本当にいやな感じしかしません。また、この間、勢力を失いつつありますが、ISはファシズムそのものです。そのように、現在、ファシズム的なものが、世界各地で大手を振って表にせり上がってきています。

しかし、こうした動きを「リベラル対ファシズム」といった発想の枠組みに落とし込んでし

まうと、「ファシズムと闘うことのできるのは、あくまでもリベラルだ」ということになって、「コミュニズム」が見失われてしまいます。ファシズムというのは、あくまでも、資本主義の危機が「反資本主義」に転化しないように修正して資本主義を温存する運動でもあるので、リベラルというだけでは対抗は無理です。

この例が適切かどうか分かりませんが、トランプが大統領選挙に登場してきた際に、「コミュニズム」を体現しているかどうかは別にして、バーニー・サンダースがトランプの対抗馬として注目されました。しかし、結局、ヒラリー・クリントンがサンダースを覆い隠すようにして出てきたという構図を思い起こしてもらえば、そのことはよく分かるのではないでしょか。トランプのような存在をファシズムと言い切っていいかはもう少し厳密に考えなければいけないでしょが、いずれにしても、「ファシズムやファシズム的なものに対抗できるのはリベラルしかない」という発想でいいのかという「問い合わせ」を、この場では投げかけておきたいと思います。

水平的な分権自治を目指すクルド独立運動

私がずっと気にして見ているのが、国家をもたない最大の「少数民族」のクルドの動きです。2004年に、国連大学前でクルド人2家族が座り込みをする事件がありました。日本が難民を受け入れるのは皆さんもよくご存じだと思いますが、トルコから日本にやって来て難民申請をしたクルド人たちを日本政府は難民として認めず、下手すればいつ送還されるのか分からないということで、彼らは座り込みをしたのです。しかし、座り込み抗議は警察によって排除され、しかも結局、そのクルド人家族の父親はトルコへ強制送還されてしまうということがあったのですが、そのときのことをきっかけにクルド人について関心をもつようになりました。

今、シリアが内戦で壊滅状態になっています。ただ、そうした状況にあっても、希望を感じさせるような動きが、ここ数年出てきています。トルコ国内でクルドの独立を目指すPKK（クルディスタン労働者党）という反体制武装組織があります。そのリーダーのアブドゥッラー・オジャラン（通称アポ）は、トルコの刑務所の中にずっと収監されています。彼は獄中で勉強して、フランスの思想家のミシェル・フーコーやエコロジー的な分権自治運動を提唱している米国のアナキストのマレイ・ブクチンなどの著作を読んだそうです。オジャランの率いるPKKは、もともとスターリニスト的な組織だったようですが、マレイ・ブクチンなんかの理論に影響されて、水平的で分権的な方向に運動の舵を切っています。

「アラブの春」以降、シリア国内でもそうした動きが出て来てアサドがそれを弾圧し、内戦状態になった隙に乘じて、ISなどの勢力もシリアに入ってきた。ISは、シリアのクルド人に対する虐殺を行い、女性や子どもを連れ去って奴隸や性的奴隸にするなど残虐を極めました。それに対して、トルコのPKKの影響を受けてクルド人の独立を目指す、シリアのYPG（クルド

人民防衛部隊)とその女性組織のYPJ(クルド女性防衛部隊)が実際に銃を取ってISと戦っているんですね。YPGやYPJの隊員たちは、家族を虐殺されたり奴隸にされたりしているわけですから、当然、ISに対する強い憎悪や敵愾心をもっています。そのようなこともあるって、シリアのクルド人たちは果敢に戦って、2014年にISが占領していたコバネという町を奪還しました。



戦闘訓練中のYPJの隊員

そうして自分たちが奪還した地域で、「コミューン」というか、男女平等で民主的な分権自治制度を構築しようとしているようです。欧州や北米のアナキストなども、そこに「義勇兵」として参加しているようです。



自らの手で「解放区」を守る

その画像をいくつかお見せしたいと思いますが、こんな感じで、YPJの女性兵士たちが銃をもって戦闘訓練をしています。

この画像も戦闘訓練の場面ですが、その下のキャプションに、英語で「ロジャーヴァを放棄するな」と書かれています。



「義勇兵」の写真の前で

この画像では、このように覆面をした女性兵士たちが壁を背にして並んでいます。米軍はどうやらシリアのクルド人支配地域から撤兵するようですが、今トルコがそこに介入し始めているようです。そうなると、またどうなるか分かりません。彼女たちの後ろの壁に大きく掲げられている写真は、たぶん欧米から「義勇兵」としてそこに入った人だと思います。名前は忘れたのですが、「義勇兵」として参加してISとの戦闘中に亡くなったり、確かに英國のアナキストの女性です。

YPG/YPJの「マニフェスト」というか、綱領的な文章をまとめた『ロジャーヴァの革命——シリアのクルディスタンにおける民主的自律と女性解放』という本が英語で出版されています。新評論という『ネオリベ現代批判序説』を出した出版社に、その本を訳してくれる人を見つけて早く翻訳してくれ、と私がしつこく言ったので、翻訳作業が進んでいるんじゃないかなと思います。それはいいとして、その本の序文を書いているのが、デヴィッド・グレーバーなんですね。こうしたクルド人たちの闘いが生み出した「解放区」での自治・自律の実践の中に、旧来のマルクス主義が放逐したものや、見捨ててきたものが「回帰」しているという気がしていて、とても希望を感じさせます。ただ、私もそれほど詳しいわけではないので、そこで具体的に何が実践されているかについては、これからちゃんと調べなきゃいけませんが。

ちなみに、ちょっと補足すると、クルド人全体としてはイスラム・スンニ派が多いのですが、ヤズィディ教徒など非常に希少な宗教を信仰している人たちもいます。ISは、こうした人たち

を虐殺・迫害したのです。

都市生活への「依存症」を問い合わせなおす

それでは次に、自分たちはこれからどうするかということで、やっと「本題」に入ったという感じですが、今日の集いでは、「〈都市〉への権利を生きる〈サンディカ〉」ということをめぐって私に話して欲しいということでした。そこで考えたいのは、いかに「都市」を生きつつ、「都市」を乗りこえるかということです。

都市というのは、やはり、「都市文明」や「文明生活」があつて初めて成り立つものです。たとえば、古代の中国であれば、大規模な治水・灌漑施設が造られて都市に水を引くようになって、それにともなって官僚制が発達し、強大な東洋的専制帝国が成立したということを、アメリカに亡命・帰化したカール・ウィットフォーゲルというマルクス主義史家が言っています。そのように、権力者は、帝国を成立させるべく、まず都市の構築に着手する。ヨーロッパの中世では、都市に城壁を張り巡らして、そこに教会権力や領主の権力などを集中させました。

近代資本主義の時代になると、都市にたくさん工場ができる、労働者を農村から人口を移動させて、労働者を「労働力」として「再生産」するためのインフラが整えられますが、それが都市というものでしょう。今、われわれは文明生活に「中毒」させられているようなものじゃないでしょうか。そこから抜け出るのは難しいことですが、その一方では、そこからどう「離脱」するかということも考えておく必要があると思います。つまり、水道の栓をひねればすぐに水が出てくるとか、電気のスイッチをパチッとひねれば明かりが点くとか、ちょっと歩けばコンビニがあってお金を出せば大抵のものは買えるとかいうのは、ある種の「依存症」として考えてもいいでしょう。それなしには生きていけないと思わされてしまうというのは、やはり、まぎれもない中毒状態です。都市というのは、結局、そういうことで維持されているんだと思います。

私たちとしては、都市を活用しつつ、都市的なものを「封じ込める」と言うか、あるいは、「虫食い」のようにして、都市から離脱するための試みをこれから考えていけたらいいと思うんですね。結局、都市というのは、人間を定住させるための「装置」だと言ってもいいでしょう。藤田弘夫という都市社会学者は、「都市はそれ自体、農村から食料を奪う力を持っている。農村の飢えを前提にしてでも、都市は生き延びようとする」と言っています。たとえば、日本で都市住民が飢餓の危機に瀕したのは、大日本帝国が敗北して国家権力が失墜し、農村から食糧が届かなくなった時でしょう。食料を媒介にして都市と農村は関係していますが、そのように農村から食糧を調達する力をもつというのが都市の本質だというわけです。

都市の本質ということについてもう少し言えば、そこではすっかり貨幣経済が「インフラ化」しているというか、金がなければ生きていけないような場所にするということが、その根底に

あるでしょう。実際に都市に住んでいると、ちょっとしたことでいちいち金をとられます。自転車をちょっと置くのに100円とられるとか、休むにしてもチェーンのコーヒーショップだし、どこ行くにも電車賃をとられる。本当に何をするにも金ばかりかかりますが、都市生活というのは、そういうことが大部分を占めています。「キャッシングレス」なんて言われていますが、もちろん、それは完全に貨幣経済に生活が組み込まれた状態ですので、私が言いたいのはそういうことではありません。

今の日本では純粋な農村なんてもうなくなってしまっていて、どこに行っても都市から逃れられないというか、すべてにわたって都市が全面化しています。しかし、そうではあっても、私としては、貨幣が前提の生活から少しずつでもいいから離脱する方へ向かいたいと思っています。

ドイツでの「スクウォット」運動の実践

都市生活からの「離脱」ということに関連して、海外での闘いというか、都市の内部や郊外でのアクションや抵抗運動についていくつか紹介しましょう。ほんのつい最近、ドイツの警察によって抵抗運動の参加者の大規模な排除が行われてしまったのですが、ドイツの中部のケルンの郊外からほど近い地域にハンバッハ鉱山があります。その鉱山をさらに拡大しようとして、「ハンバッハの森」が伐採されることになりました。こうした動きに対して、アナキストやエコロジストたちを中心に、その森で実際にこうしたツリーハウスを作り、そこで抵抗していたわけです。これはかなり作りこんでいる画像だと思いますが、こんなふうに住めるようにしているわけです。



ツリーハウスの排除と闘う

海賊旗なんかを掲げてなんだか楽しそうですが、これはずいぶん高い場所にあるツリーハウスですね。映像で見たのですが、ちょうど警察が排除しようとしているときに、彼ら／彼女らがどうやって抵抗しているかというと、木の幹に抱きついたり、木の枝にロープをかけて蓑虫みたいにぶら下がったりしているわけです。

これはおそらく排除の時の写真で、これが警察ですが、それに対してこうやって抵抗しているのです。なぜ警察がこれほど強引に排除しようとするかというと、鉱山を拡大するのに邪魔だからです。

このようなスタイルの抵抗があるということですが、こういうのもある意味では、貨幣交換を経由しない「生」のあり方です。そこにいろんな人が訪ねてきて、交流や生活が生まれる。そして、このように、木の上にロープでつながりあいながら生活しているということです。

あるいは、木の上で愛を育んでいたりとか。こういうのを見ると、いいなと思いますね（笑）。

これは「ハンバッハの森」を守るためにデモです。

このように、単に抗議行動というよりも、森に勝手に家を建てて住みながら、自治的な空間や「解放区」をつくっています。

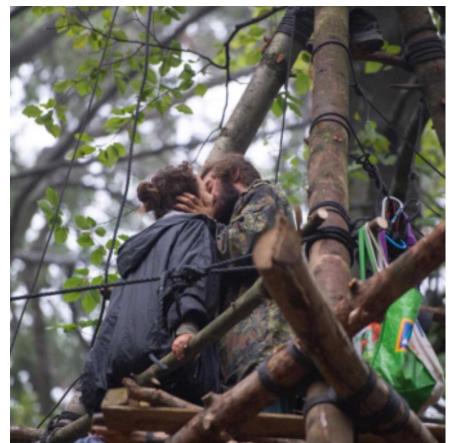
「ハンバッハの森」はドイツですが、フランスでもこうした抵抗運動が展開されているところがあります。フランスのロワール地方の中心都市のナントの郊外にフランス政府が広大な土地を買い上げて、ノートルダム・デ・ランド空港建設に向けて農地や森を更地にしようとしてきたのですが、それに抗議する人たちが空港建設予定地を占拠して40年以上にわたって反対運動を続けています。

このように大規模な開発計画に反対して自然環境や農地を占拠・「防衛」している地域を、フランスでは「ゾーン・ア・ディフェンドル (zone à défendre)」、略してZADと呼んでいるそうですが、私はそのことを知って、日本の「三里塚空港建設反対運動」を思い出していました。また、イタリアのトリノとフランスのリヨンを結ぶTAV（高速鉄道列車）の建設に反対して、イタリアでもこうした抵抗運動が繰り広げられていて、建設予定地を占拠して「自律ゾーン」を形成しています。

そのように土地占拠を通じて自治・自律的な空間を形成することで、巨大開発に抵抗している運動がヨーロッパ各地に数多くあるということです。そこに運動の「強度」があるし、今日の集いで言われていることばを使えば、まさに〈生のサンジカ〉や「生の拡充」の実践ということになるでしょう。一言で言えば、「スクウォット」ですが、今、例に挙げた運動は、都市から離れたところで行われているのですが、都市の中心部でも、空き家や空きビルを占拠してそこに自治・自律的な空間を創出するという運動が行われています。

これは「ハンバッハの森」の画像ですが、このように、反対運動の中でアーティストが作品を作っています。日本の運動では、アートや表現行為が登場することは少ないように思いますが、海外の運動では、いつも壁画や版画、絵画といったアートが何らかの形で出てきます。これも重要な「生の拡充」です。

これはベルリンのスクウォットされた建物の写真で、一つのビルを丸ごと占拠していますが、この「リービヒ34」という社会運動センターには、約40人が住んでいるそうです。その壁に「自律的青年センターなしに、私たちの日々はない」とドイツ語で書かれていますが、こんなふうに日常をやりとりしているんですね。



ツリー・ハウスで愛を育む



森の中のアート作品

これは、「Potse」とか「Drugstore」と呼ばれている、1972年に若者たちによって始められたベルリン最古のスクオットハウスの内部です。このように、空きビルを占拠して、ビルの壁に色を塗って、グラフィティを描いたりしながら、「解放空間」を創出して、自分たちでそこを守る。今、お見せしたのは、ドイツのベルリンの例ですが、ドイツではベルリンだけでなく、結構あちこちでこうした



ベルリンのスクオットハウス



スクオットハウスで闘う

スクオットが行

われているようです。しかし、日本ではこうしたスクオットは本当に難しくて、それを受容するには社会の幅があまりにも狭いし、たとえ、スクオットしたとしても、どうやったらそれを持続させられるかということがあります。

ただ、スクオットとはちょっと違うかもしれません
が、つい最近も警察が入ったようですが、京大の自治寮

などはそういうものではないかと思います。ドイツのスクオット運動は常に順調ということではなく、占拠した建物の地権者に家賃を払っていたのに、地権者が裁判に訴えて追い出しにかかることがあるようです。そうではありますが、やはり、日本のわれわれも、自分たち自身の自治・自律空間を確保するためのノウハウが欲しいと思いますね。



スクオットハウスの内部風景

都市に「巣穴」をつくる

東京なんかにいると、家賃が高いですから、家賃という問題に大きく突き当たります。私は、埼玉の所沢に住んで6年目になるんですが、それまでは東京都の東村山市にいました。学生時代から25年間住み続けたんですが、当時は「バブル期」だったので、5畳くらいのスペースで家賃が月に4万5千円くらいでした。住み続けていて、さすがに家賃が高すぎるので、途中で家主と交渉して家賃を1万円下げさせたのですが、それでも25年間住み続ければ、家賃の総額は一千万円を充分超えてしまいます。結局、そのアパートを出るときに、「これ、自分のものにならないんですか?」と捨て台詞のように言い捨てて、出てきましたけれども。そのように、われわれの「生」を切り縮めて、削ぐのが家賃です。

この場に持ってこなかったのですが、『VOL』という運動・思想雑誌の別冊に『VOL Lexicon

『用語集』』というのがあり、そこに私も「家賃」という項目を書いています。そこにも書いたことですが、家賃というのは、払わないとどんどん返済額が溜まっていく、一種の負債のようなものじゃないですか。ただそこに住んでいるだけなのに日々金が差し引かれ、われわれの「生」がマイナスを帯びる。それに対して、もっとスクウォットするとか、あるいは森の中にひっそりと勝手に誰かの土地に住居をつくるとかいうことがあってもいいと思います。しかし、日本で本当にそんなことをすれば、すぐ「山狩り」されてしまいそうですが。なかなか難しいですね。

そう考えると、自分で自分の住居を確保するというのは、まさに「バリケード」みたいなものだと思います。そうなれば、海外でのスクウォットのようにアートもそこに生まれます。ある種の「問題提起」として、そのような住居のあり方を考えてもいいのかと思いますし、「階級的家賃論」というか、今後の課題として、ぜひ、こうした問題を皆さんと一緒に考えたいと思います。

今日の私のメモに「カフカ 巣穴」と書きましたが、カフカの短編小説に「巣穴」という作品があります。それは、何の動物かよく分からぬのですが、ある生き物がとにかく地面に穴を掘って、自分の巣をどうやって作るかということを一生懸命考えるという話です。これが結構面白いのです。フランスの哲学者のジル・ドゥルーズが、「リゾーム」、つまり「地下茎」ということを言っていましたが、「巣穴」というのは、そのようなイメージではないかと思うのです。ドゥルーズは「根にならない」と言っていますが、根というのは、どこかでそれ以上進まなくなってしまって、行き止まってしまう。一方、地下茎というのは、まっすぐ根を下ろしていくというのではなく、途中で結合しながら、うねうねと拡がって行き、止まらない。

こうした「地下茎」的な棲み処というか、いたるところに穴を空け、「ここに入り口ができた」とか、「ここからも入れる」、「いきなりここに行き当たった」、「出口があった」、「出口を作った」といった、得体のしれない動物が巣穴をつくるような家のあり方が、興味深いと思うんですね。おそらく、ベルリンの街のスクウォットハウスもそういうものだし、「ハンバッハの森」のツリーハウスも、木の上でつり橋を渡したり、他の家に行けたりして、とても「巣穴」的じゃないですか。

私のメモに「種を蒔く」とありますが、そのことについて少し言うと、先ほど触れた『VOL』の創刊号に「アヴァンガーデニング」という特集がありました。その頃、ニューヨークに古くから住んでいる人たちが、農業ではなく「ストリートガーデン」ということで、道路脇やビルの横の空き地などに勝手に種を蒔いて菜園や花壇を作っていました。私たちも、同じように種を握りしめて、いろんなところに勝手に蒔いていくというか、いたるところで「ガーデニング」して、都市を違うものに変容させることをしてもいいんじゃないでしょうか。「ガーデニングゲリラ」とでもいうか（笑）。

今、日本にはおよそ800万軒の空き家があるらしいのですが、廃校もこれからどんどん増え

るでしょう。それなのに家賃はやたらと高いのですが、こういうのをスクウォットしちゃったらダメなんでしょうか。「問題提起」として言っておきたいと思いますが、そういったところに金のない若者なんかが棲みついてしまえばいいのにとさえ思います。私が今住んでいるところは住宅街ですが、周囲に結構空き家があります。それを不動産会社やディベロッパーが買い取ってリフォームして、何千万円といった値段をつけて売り出しています。そういうことをいつまでさせておくのかと思いますね。

もうひとつ、「家族」をどう考えるかということがあります。今の日本では、共同性や人間のつながりを考えようとする際のモデルが、核家族や血縁関係、つまり「血のつながり」になってしまいます。ナチは「血と大地」や「アーリア人種の血統」を強調しましたが、家族はその基盤になっているわけです。国家主義やファシズムの根っこには、それがあります。近代市民社会の構成から国家を考えたヘーゲルの『法哲学』でも、市民社会の基礎単位は「家族」で、そこでは家長こそが十全な市民たりうるような論理構成になっています。国家はそのような市民社会の上に存立させられるわけです。そういう「国家」に足もとをすぐわれない、「家族」的ではないような共同性を私たちは考えていく必要があるでしょう。

今日の私のメモに、「『孤児院経営』としてのスクォット」とありますが、あくまでもちょっとした思いつきで言いますが、そういうもののモデルとして、私たちが社会的に「孤児院経営」ができるだけの力量があれば、なにか突破口になるのかなと思って、そう書いておきました。そういう力量は、空き屋や空きビルをスクウォットして、それを維持する力量にも重なるのかなと思います。

「パルチザン」という抵抗のスタイル

マルクスの『ルイボナパルトのブリュメール18日』の中の有名なことばに、「歴史は二度繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として」というのがあり、私も以前からそのことばを引用し続けてきましたが、日本のこの状況はそれを実感させます。それこそ、ネット右翼とか安倍政権とかいうものも、「戦前回帰」的な統治体制への欲望があるからそうなっているんだろうと思いますが、私たちは、現在のこうしたファシズム的な動きに、きちんと対抗していかなければなりません。これは私だけのこだわりかもしれません、その際に、やはり、「パルチザン」の問題は、ぜひ考えておきたいと思っています。

先ほどの「非対称戦争」の話ともつながることですが、つまり、国家の正規の戦闘員ではない、非正規の抵抗組織のもつゲリラ的な戦闘性というか、合法性に依存した「シチズンシップ（市民性）」に対して、そうではない「パルチザンシップ」のようなものを、私たちの側がいかに構築していくかということです。そのような意味では、「市民運動」のような、あらかじめ限界が見えている運動だけで力を持ちえるとは思いません。ムッソリーニのファシズム政権

と戦ったイタリアのパルチザンや、フランスのレジスタンス、スペイン市民戦争の時の「国際旅団」もそうですし、先ほど言ったクルド独立を目指す武装組織も、かなり正規の軍隊に近い形になっていますが、やはり、ある種のパルチザンですね。

ところで、パルチザンというのは、「公然化」したら権力にやられますから、反ナチ抵抗運動でもそうですが、都市内部で「市民生活」を送りながら、実は、地下組織のメンバーだったというような「覆面性」が大事だと思います。先ほどのドゥルーズのことばを借りれば、そういった「根にならない」ような、「巣穴」的抵抗のあり方を示すものとして、「パルチザンシップ」ということばを使っておきます。

先ほども少し触れた『HAPAX』の第7号の「反政治」という特集に私も文章を書いていますが、その同じ号の中に「不可視委員会」に近いアナキストのグループの人たちが「ホスティス」という通信に書いた印象的な文章があって、「パルチザンシップ」の意義や重要性を強調していますので、紹介します。

「パルチザンシップは市民性（シチズンシップ）と対比されるべきものだ。」（ホスティス「残酷の政治について」『HAPAX 7 特集 反政治』）

「パルチザンとは、秘密裏に内戦を遂行する者たちの謂いである。よりはっきりというなら、ここでわれわれのいうパルチザンとは、政治的な戦略として何らかの主義主張を固く信じる者たちのことをいうのではなく、たとえばナチに対するゲリラ戦を開戦したソ連の赤軍パルチザンのような、歴史上に実在した武装した集団のことである。われわれの力はまさに彼らの闘争のように、敵に占拠され包囲された環境のなかから引き出されるのでなくてはならない。」（同上）

この場の皆さんもそうだと思いますが、私は、現在の状況の中で、支配権力に「包囲されている」というか、支配秩序の中に封じ込められて「生」を囲い込まれている、という感じが強くしています。こうした状況の中から、そういった「パルチザンシップ」とでもいうようなものを、どういう形であれ、いかに生み出していくかが問われているように思うんですね。

学生にテキストとして使ってもらうということで、私は昨年3月に『現代社会用語集』という本を出したんですが、講義で扱うテーマや、その中でキーワードになるような言葉を並べて論じてまとめたものです。その項目のひとつで「白土三平」を紹介しました。あの劇画家の白土三平です。

白土三平は「カムイ外伝」などの忍者マンガで知られていますが、彼のマンガは手塚治虫なんかのマンガに対するひとつの「アンチテーゼ」として『ガロ』を主宰して、同誌に掲載されたものです。

忍者というのは普段何をしているかというと、新しい武器や忍術を開発したり、いろんな薬

を作ったり、農作業をやったりしているわけです。その他にも、忍術や陰謀とかいうこともありますが、いろんな修行や訓練をして、身体を鍛えたりしています。昔から忍者というと、成長の早い背の高い植物の種を撒いて、芽が出たら毎日その上を跳んで修行をしているうちに人間の背丈ほどにもなって、いつのまにか高く跳べるようになっているといったイメージがありますね。忍者というと手裏剣ですが、白土三平のマンガにも、突飛で想像的でありかつ創造的な武器や忍術がたくさん登場します。それが実際の戦いの場面で本当に使えるのか、実行できるのかどうかは知りませんが（笑）。

海外の街頭闘争を見ていると、彼らは様々な武器を発明して使っています。そういう意味では、実にクリエイティブです。最近ですと、デモで煙幕を焚いていますし、警察が催涙弾を撃つてきたらテニスのラケットで打ち返すとか、あるいは、警察に対抗して盾を持つ場合もあります。「ブラックブロック」の愛用する黒のパーカーというのも、姿を目立たなくするという意味で忍術みたいなものでしょう。

毛沢東に『体育の研究』という論文がありますが、私も、まあ、時間の余裕があれば、太極拳でもやって養生して身体を鍛えながら、いかに「パルチザン」になりうるか考えてみたいと思っています。中国共産党の「長征」というのも、ある種のパルチザン部隊ですね。

サディズムの「体制化」に「マゾヒズムの戦略」で対抗する

ファシズムというのは、サディズムの「体制化」と言ってもいいと思います。日本でも平気で「痛みを強いる改革」とか言いますが、サディストというのは、相手が嫌がるのを分かっていて、確信犯的にやっているわけです。つまり、人が嫌がるのを見るのが、おのれの快楽でもあるからです。

テオドール・アドルノやエーリッヒ・フロムといったフランクフルト学派の知識人たちには、ナチズムを精神分析的に捉えて、「サド=マゾ」というふうにサディズムとマゾヒズムを等号で結んで、サドとマゾとは「対称的」なものだと捉えています。しかし、先ほど紹介した「ホスティス」の人たちは、それとは違った論点から面白いことを言っています。つまり、パルチザンシップに立つ者たちにとって、マゾヒズムというのはサディズムとは「非対称的」なものであり、われわれは「マゾヒズムの戦略」をとらなければいけない、ということです。おなじく、哲学者のドゥルーズも、マゾヒズムをサディズムと等号で結んだり、対称的に考へるのでなく、そこにもっと独自でユニークなものがあると言います。

「しかし、だとすればマゾヒズムはどうか。それは泥にまみれ地べたに這いつくばることの喜びではない。マゾヒズムは冷淡に取引する。だがそこには、その冷淡さに対応する弁証法的な巧妙さが存在している（マゾヒズムは無関心さとは別のものである）。マゾヒズム的な

「情況は何らかの誘因とともに始まるが——それは刺激し、挑発し期待感を高める——しかしそれはただお預けをくらわせ、欲求不満にさせ、そしてひとを狂氣へと駆り立てるためにそうするのである。こうしてマゾヒズムの誘惑は、ある信を創造することになる。ただしその信が、ひとをもどかしさのなかの待機にとどめおくことができるという限りで。」（ホスティス「残酷の政治について」『HAPAX 7』）

つまり、体制化したサディストたちに対し、私たちの側は「マゾヒズムの戦略」を行使して、混乱させ、お預けをくらわせ、連中を狂氣へと誘いながら、その力を弱体化させていくということが大事なのではないか、ということです。忍者の「戦略・戦術」というのは、いつもそういうのを駆使しますね。敵から受ける苦痛に直面しつつも、その雁字搦めの状況そのものの中から反撃の手がかりをつかみ、そういう「もどかしさのなかの待機」の中で、自分が変わっていくというか、主体を変容させ自己の快楽を高めてゆく。「ホスティス」の人たちは、そのようなことを「マゾヒストの戦略」と言っているのではないかと思います。また、彼らは「マゾヒズムというのは残酷を受け入れる」と言っていますが、といえば、確かに白土三平の劇画はとても残酷だったりしますね。このパルチザンということをどのように考えるのかというのを、今後も大事なテーマだと思っています。

さて、話をそろそろ終えねばならなくなってきたので、急いで次に移ります。「生の無条件の肯定」にとって、ひとつありうる選択肢として、生きるために必要な金を誰にでも無条件で支給する「ベーシックインカム」があるのではないかと思います。もちろん、私は別に「ベーシックインカム」が万能だとは思っていません。むろん、所詮はカネなんですが、ただ、「たかがカネ、されどカネ」ということもあるはずですので、私たちとしては、とりあえず金を要求しながら、別の「生」のあり方を探ったり、模索したりするということが必要なんじゃないかと思います。とにかく、まず取れるものはできるだけ取ってやろうというか、マゾヒスト的に「ちょうどいいよ」としつこく言い続けるとかいうことが、あってもいいかもしれません。そういう戦略・戦術みたいなことはあるかとは思いますが。

とにかく左翼の人間は、「福祉国家なんて、結局、『修正資本主義』だろう」といった感じで、それ以上考えなくなってしまいがちです。しかし、日本すぐに革命ということもありそうにないし、取られっぱなしの人民が取られたものを取り返すということだってありうるわけです。「ベーシックインカム」が実現したあとで革命をしたっていいわけですし、税金や借金、労働などに雁字搦めになった「生の負債化」からの解放ということもあるでしょう。まずは、難しい理屈を抜きにして、単に生きることにさえカネが必要だというのであれば、やはり、カネが欲しいし、「カネを寄こせ」と要求するということでいいはずです。

「燃料税値上げ反対」運動から「政権退陣」運動、さらに？？

というようなことで、今日の私の話を終わらせようかと思いましたが、まだ、フランスの「黄色いベスト運動（ジレ・ジョーヌ）」の画像をお見せしていませんでしたね。最後に、いくつかその画像を紹介しながら、もう少しお話ししたいと思います。

「黄色いベスト運動」というのは、いま現在、激しく闘われている運動ですが、インターネットの動画なんかを見ていると、若者たちだけではなく、結構年配の人たちも、黄色いベストを着て元気に参加しています。フランスの人たちは、そのように何かあればすぐに街頭に出ていくように体ができているんでしょうね。日本から見ていて、意外というかちょっと興味深く思うのは、そこに「左」の人たちだけではなく、「極右」と呼ばれるようなグループも参加していることです。その中には、「フロン・ナショナル」だけでなく、王党派のような人たちもいます。そのように、今、社会的な軸が「右か左か」というよりも、むしろ「上か下か」というところにあるのではないかと思います。それに対して、マクロン政権は「『黄色いベスト』に極右『国民戦線』が入り込んで扇動している」というデマを流して運動をつぶそうとしていますが、むろん成功していません。

それともうひとつ言えば、フランスは中央集権国家で首都のパリにばかり富が集中して、地方の富がパリに吸い上げられたり、地方が顧みられないことに対する抗議ということもあって、地方に住んでいる人たちがカンパを出し合ってパリに行き、「黄色いベスト運動」に参加するということもあるようです。そういうわけでも、パリを中心に、毎週末、大規模な街頭行動が繰り広げられてきましたが、先日、あるツイッターを見ていたら、「今は『第8幕』だ！」とのことです。この「持続力」というか、本当にいつまでやるんだという感じですが、「黄色いベスト運動」は年が明けても続いています。

とにかく、今回のことにも限らず、フランスはほぼ毎年このような激しい街頭行動をやっています。2016年には、「労働法改悪反対」で、労働時間の「規制緩和」や残業手当の切り下げといったオランド政権による労働法改正に対して、赤・黒の勢力を中心に激しい抗議が展開されました。

皆さんも、すでにどこかで「黄色いベスト運動」の写真や映像を見ているとは思いますが、いくつかその画像をお見せしたいと思います。どこかで聞いた話ですが、フランスのAmazonの最近の売り上げ第一位の商品が、例の黄色いベストだそうです。それは元々、フランスで自動車を運転する際に必ず備え付けて置くことになっている備品なのですが、今ではすっかり運動のシンボルになっています。

こんな感じで、パリの凱旋門の前で街頭行動をしています。



凱旋門前での「黄色いベスト運動」

このように、街頭にバリケードができています。

これはパリではないと思いますが、こんな感じで車がていねいにひっくり返されています。

海外のジャーナリストはすごいですね。とにかく運動の「最前列」にカメラをもって出てきて、生きのいい写真を撮ろうとします。日本のマスコミが、警察の後ろから控えめに写真を撮っているのとは大違います。

皆さんよくご存じのように、「黄色いベスト運動」は、最初、環境保護を口実とした燃料税の大幅な値上げに対する抗議運動として始まったのですが、燃料税の値上げ案の撤回後も「マクロン政権退陣」を求めて、このように激しい街頭行動が展開されています。最近では、もはやそれさえも突き抜けてしまっているのかもしれません。これまでには「黒っぽい」人たちが火炎



街頭で警官隊と対峙する

瓶を投げたりして、街頭で暴れまくっているのに関わらず、不思議と死者が出なかったのですが、今回は死者が出ています。

「黄色いベスト運動」については、ネット上でたくさんの動画や画像が上がっていますので、皆さんもぜひ見ていただければと思いますが、ほとんど市街戦をやっているんじゃないかと言いたくなるような状態です。

フランスの警官隊は、デモ隊鎮圧のために催涙弾を使っているのですが、それは単に催涙ガスを吹き出すというものではなく、パンパン弾けてとても危険なのです。先日、その催涙弾を製造している企業に抗議のデモをしている映像もありました。また、別の映像では、元プロボクサーでフランスのライト級のチャンピオンだった人が、完全装備の警察官に素手で立ち向かっていて、警官隊の方は完全に押されていましたね。結局、その元プロボクサーの人は逮捕されてしまったのですが、すぐ彼に対する救援体制ができたようです。

まあ、そこまで行かなくても、国家暴力にいかに対抗し、それを「無化」するのかということが、「パルチザンシップ」の獲得にとって重要な課題であるように思います。



激しい街頭行動の中で炎上する車両

話がすっかり「尻切れとんぼ」になってしまって、全然「答え」にならないことばかり言っていますので、本当に申しわけないのですが、この後はいろいろと話をしながら、私たちとして何をしていったらいいか、ぜひ皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。